

美術部へようこそ! 徳島県北島町立北島中学校

地元の特徴を生かした作品づくりに取り組み、地域との交流を大切にしている美術部取材しました。

ひょうたんの町, 北島町

北島中学校美術部員が手にしているのは、鮮やかに彩色されたひょうたん。このほど北島町内で開かれた「全日本愛瓢会」の展示会に出品された。

北島町は、周囲を旧吉野川と今切川に囲まれ、その形がひょうたんのように見えることから、町おこしの一環として、祭りなどひょうたんにちなんださまざまなイベントを行っている。今回の展示会もその一つで、全国の愛好家が丹精込めてつくった作品が一堂に並ぶ中、北島中学校をはじめ、近隣の小学校や幼稚園などから出品された作品が訪れた人の目を楽しませていた。

生徒の個性光る“百花繚乱”

北島中学校美術部では、「百花繚乱」をテーマに、四季折々の花をモチーフにした絵柄に挑戦。花の微妙な造形や鳥、人物などを細い筆で丹念に描き込んでいく。写実的なものや、日本らしさを追求したもの、人物を配したものなど、それぞれの生徒の個性が光る30個の作品をおよそ3か月かけて作り上げた。

岸濱里奈部長は、「ひょうたんは表面が丸いので、下書きがとても難しかった。金色で下地を塗った上に、アクリル絵の具で着色していくのだが、なかなか色が乗らずに、特に薄

い色を表現するのが大変だった」と制作の苦労を振り返る。

だが、「みんな、最高の出来だと自信がもてる作品をつくり上げることができた。ひょうたんに花を咲かせ、徳島も花が咲いたようににぎわってほしい。そして、これを見た小学生たちが、北島中の美術部に入りたと思ってくれば」と、作品に込めた思いを話してくれた。

地域と美術で交流

同部は、年間で4~5作品に取り組んでいる。その中で、風景画や人物画といった個人の作品に加え、外部への出品なども積極的に行う。これまでもANAからの依頼で、徳島空港へ時間に余裕をもって来てもらうよう、乗客に早期来港をよびかけるポスターを制作するなど、地域との交流を大切にしている。「依頼があれば基本的には断らない。いい作品をつくって外部へ発信し、生徒たちの集中力と意識を高めていきたい」と顧問の白井明美先生は話す。

活動時間が限られている中で、次に意欲的に作品づくりに取り組む生徒たち。白井先生は、特に「集中力」を大切にしているという。42人という大所帯の美術部だが、制作中は、美術室の中は心地よい静寂と緊張感に包まれている。部員や先生方の美術への熱意が伝わってくるようだった。



上/42人と大所帯だが和気あいあい、制作時以外は明るい笑顔が絶えない。
下/2・3年生を中心に、個性が光るひょうたん30個を3か月かけてつくった。

教室を飛びだして

横浜美術館 中高生プログラム

子ども自身が美術について考え実践する、横浜美術館の取り組みをご紹介します。



横浜美術館が行う「中高生プログラム」は今年で5回目を迎える。この取り組みは、ヨコハマトリエンナーレ2014のアーティストック・ディレクターを務めた美術家・森村泰昌氏の「現代美術のおもしろさ、そして難しさをも子どもに提供したい。お子様ランチではなくフルコースとして」という言葉から生まれた。

今年も企画展「モネ それからの100年」の開催に合わせ、鑑賞や現代作家との交流など、4か月にわたるプログラムが実施された。中高生の学びの成果が発揮されるのは「こども探検隊」だ。これは、中高生が小学生に向けて展示ツアーと制作のワークショップを行うというもの。その内容の全てを中高生たちが自ら考える。彼らにとって、異年齢の子との交流がもたらすものは大きい。人任せではなく、「自分たちでつくるんだ」という覚悟が生まれるという。

展示ツアーにも制作にも、大人はいっさい干渉しない。スタッフは子どもたちに近づくことなく、彼らだけの世界を見守ることに徹する。1時間におよぶ展示ツアーで、小学生は中高生の言葉に熱心に耳を傾け、飽きることなく質問も飛び交う。年の近い者どうしだからこそ届く言葉があるのだろう。

「美術を通じ、未知のところに踏み出していく子どもを支えたい」と主任エデュケーターの端山聡子さんは言う。ここは、毎日通う教室とは違う、美術がつなぐ子どもたちの居場所になっている。



「こども探検隊」の展示ツアーの様子。小学生を案内する中高生の姿は真剣そのもの。(写真:加藤健/提供:横浜美術館)

放課後

第14回

ART